

二十世紀初頭、大阪における木賃宿の状態

——キリスト教ジャーナリスト松崎天民「木賃宿」の復刻と分析

後 藤 正 人

(法社会史・社会科教育研究室)

Masato GOTO

一 はじめに

日本の下層社会に関するまとまったルポルタージュとしては、一八八〇（明治二二）年代以降、鈴木梅四郎が一八八八（明治二二）年に発表した「大阪名護町貧民窟視察記」（『時事新報』連載）、桜田文吾が一八九〇（明治二三）年に発表した「貧天地饑寒窟探検記」（新聞『日本』連載）や、松原岩五郎が一八九二年に発表した「最暗黒の東京」（『国民新聞』連載）がある。このうち、『貧天地饑寒窟探検記』が一八九三（明治二六）年六月に、また『最暗黒の東京』が増補されて同年一月に、それぞれ公刊されて版を重ねた。これらは全て産業革命以前の日本下層社会を描いたものである。片山潜と西川光二郎の『日本の労働運動』（一九〇一―明治三四年）は、日本の労働運動に影響を与えた明治二〇年代の著作四冊の中に、先の桜田文吾と松原岩五郎の二冊の書物を含めていたことに注目しなくてはならない。その後、日清戦争の賠償金などを梃子として産業革命が起こり、近

代的な賃労働者が出現して、労働運動や社会主義運動が明白に開始される。近代的労働者像を描いて有名なのは、横山源之助『日本の下層社会』（二八九九年）である。しかし、以上の作品の中では、木賃宿の検討はこれらの探訪調査の一つに過ぎなかった。

しかし二十世紀初頭、一方で社会主義詩人の児玉花外は、早稲田の後輩である西川光二郎や、花外に続く詩人の小塚空谷と共に、東京の本郷業平町の木賃宿に宿泊して、大阪の友愛協会の機関紙『評論之評論』（六〇号、一九〇三―明治三六年）に「木賃宿の一夜」を編集者として載せている。これは詩人の目を通じて観た木賃宿の探訪記である（後藤「児玉花外の随筆『木賃宿の一夜』について」）。

他方、散文に強い関心を持ち、『大阪新報』の社会探訪記者・松崎天民の「木賃宿」は、同じ二〇世紀初頭、社会主義に共感を持つキリスト教ジャーナリストとして、大阪の木賃宿に宿泊の上で、そのヒューマニズムの精神からつぶさに観察し叙述して、世の相愛の同情を巻き起こそうとした作品である。本作品は優れた内容にも係わらず、管見

の限りでは、これまでは全文の紹介も相応しい検討もなかった。

天民の「木賃宿」は、一九〇二(明治三五)年一月に雑誌『小天地』(二巻四号、金尾文淵堂刊、持主は金尾種次郎・思西)へ発表された。同誌は文芸・社会評論誌であり、薄田泣菫(淳介)が編集主任、文芸評論家の角田浩々歌客(喜三郎)と詩人の平尾不孤(花外の友人)が共編者であった(天理大学図書館蔵)。天民のこの作品の貴重性は、後に述べるように、天民が社会的改革の多少の構想を披瀝している点にも存在する。

当時の『大阪新報』は『大阪朝日新聞』、『大阪毎日新聞』に次いで大阪第三の新聞といわれていた。大阪新報社は大阪市北区出入橋西詰にあり、社長は山田敬徳である。山田は、元ボンベイ(現ブンバイ)領事で、一九〇〇(明治三三)年九月に譲り受けているが、実は当時の『大阪毎日新聞』社長・原敬の意向を受けたからである。また『大阪新報』の編集主筆は富樫柳水、編集は菊池三巴(悟郎)や結城桂陵(礼一郎)である。結城は民友社の元編集部にあり、新体詩や御伽噺を発表していた(当時の天民は小使)。それ以前の大阪新報社は、社長が池田某、編集主幹が阪根正夫であった。かつて民友社編集部地位にあり、当時大阪朝日新聞社編集部が角田浩々歌客を通じて、天民は阪根を紹介して貰い、大阪新報社に記者として採用されたのである。やがて一九〇三(明治三六)年五月には原敬が同社の社長となり、山田敬徳は副社長となる。

以下では、資料を復刻して、大阪の木賃宿に関する重要な点を分析してみたい。本文は旧字、旧仮名遣いで、総振り仮名付である。原文

を尊重したいがために、なるべく旧字を生かしたが、振り仮名は最小に止めた。なお句読点については、抜けている箇所を補い、明らかな誤りを正した。

二 「復刻」松崎天民「木賃宿」(『小天地』二巻四号、一九〇二年一月) 上等的の木賃宿

舊曆九月、十三夜の月影は淡く、混沌たる巷を照し、濁れる戀の道頓堀川に、惜しや其餘光を投じて居る。破れ浴衣の上に千筋木綿の單衣を重ね、荒い縦縞の厚司あしを着て、茶色の古帽子を阿彌陀に被つた自分は、暫し戎橋上に立つて、急激なる我世の變轉を感じたが、幸か將不幸か、自分は眞に木賃宿の一人一疊の貧天地に、人生苦闘の歴史を繰返す程、未だ心細い身では無いと心付いて、それより道頓堀を東して千日前に出たが、不夜城の騒觀、此所は自分の領分で無いから、大劇場の前を南へくと一直線に進むと、新金毘羅神社の界限に、安宿と記した行燈の懸つて居る家が、二三軒散在して居るのを認めた。此邊は紺の筒袖、厚司法被、半纏、安鬢附の臭氣等、稍都會の裏に近付いて居るので、何となく心丈夫になり、更に突當つた處を一寸斜に曲つて南へ進むと、街まちに人の往來も稀で、只安宿やすしゆくの燈影が我物顔に、客を待つ氣に見えるばかりである。

新聞配達夫となつて上野の霜夜に泣き、人力車夫となつて九段坂の雨に苦しみ、荷車挽きとなつて天神橋上に倒れ、小使となつて雪に悩み、行商人となつて重荷に病むだ自分も、幸にして未だ木賃宿の門口

を潜つた事は無いので、今宵一個の記者として其境を踏んで試れば、あ、弱いかな、自分の苦勞は未だく足らぬのである。若や天涯宿るに家無き身であつたならば、懷中には白銅貨四個を持つて居るのでも、飛込んで一夜を空想の眠りに明さうものを。只木賃宿に泊るべき眞の自分で無いが爲に、徘徊願望、容易に破れ障子に手を懸け得ないのであるが、此場合に於ける吝阻逡巡は誰しもあることで、それは一種の罪を犯す様に感じられるからであらう。

好い月夜だ。附近を散策して更に勇氣を養ひ、十時までに宿泊すれば宜いのだと思つて、自分は南の方五層樓の空地に行つた。

此邊は一帶に密淫賣婦の巢窟であるのか、木蔭より怪しの白首が印半纏の職人を送り出して、自分に近附き来る様子であつたが、月に映じた眼鏡の光に驚いて隠れるなど、なか／＼物騒極る次第である。

辻の青物屋の時計は九時を報した。最う躊躇しては居られぬので、角の理髮床より一人の男が出たのを機會として、自分は漸く破れ障子を明けて、木賃宿裡の人となることを得た。

南區難波河原町二丁目、安宿業丸山政治郎方の、入口の右側は三疊の店の間で、幅一尺五寸、長三尺餘の古机を置いてある傍には、十二歳の女子を頭に十歳、八歳、六歳位の男子と、四歳位の女子と都合五人が、其帳場机を取圍んで嬉々として戯れて居る。自分はこの意外な光景に接して、假令は戀人の墓を訪ねて一輪の花を得た様な感に打れながら、慄ひ聲で、

「泊めて貰へますかいな。」

といふと、年長の、姉なる娘が、

「何卒お泊まりやす。」
と答へて、左手で翻つて居た宿泊人名簿を開き、自分の風姿容貌を眺め初めた。

「幾程ですかいな、宿泊料は……」

「十錢と八錢……上等の方は蒲團が二枚です。」

不馴な口調で、自分と娘と問答して居ると、先刻から反古紙を延べ、頬に戯ら書きをして居た八歳計りの男子が、此時突然、自分の顔と姉なる娘の顔とを見比べて、

「姉やん九錢やで、八錢と九錢やで。」

といつて、更に自分に向ひ、

「お客さん、十錢は虚だす九錢だすぜ。」

といつたが、實に罪の無いのは小兒である。姉はそれを非常に立腹して、頬に目顔で知らせる様であつたが、無邪氣なる小兒への形容傳心術は、決して應用さるべきものではない。男子は益々面白氣に、

「然うや九錢やがな、九錢や九錢や。富田はん然うだんなア、貴君は九錢だすやらう。」

と、いつて帳場の背後の障子を細目に開けた。其處は表の室とでもいふのであらう、

三疊敷の一隅に蒲團一枚を着て寝入つた禿頭は、男子の聲に夢を破られてかウんくと右枕を左に變へて彼方に向いた。

姉娘は正直なる弟の爲に、折角の商略を破壊された口惜しさに、

「母んに告げまつせ、賢ちゃん。」

と、言葉を残して、奥の室に駆け込み、

「お客さんやで・・・。」
と添乳そいじをして居るらしい母親を呼起す様である。

二十分程出て来た母親といふのは、髪を無雑作にぐるく巻にした、眼の一寸釣り上つた色白の、三十七八の女であるが、何となく薄気味の悪るさうなのは、境遇と商賣柄しやうばいに依つて然う見えるのであらう。然し添乳の子と合せて六人の母親かと思へば、自自分は只其善人ならんことを、心窃こころかに念ずるのは他は無い。

「晩飯は未だ食ひませんが、幾程で賄うて貰へますかいな。」

木賃宿では飯を食はせない位のこととは知つて居るが、米と薪代とを出せば、無論炊いて呉れると思つて尋ねたのである。女將は寝む氣に机に凭れ、不審いぶかしさうに自分の帽子より身の廻りを眺めた末、熟と顔を見詰て、

「高うおますせ賄ひは・・・一度が十錢程だんなア。それなら御飯屋ごぜんやの方が安うおますわ。一日が三十錢、泊りとで四十錢だすささきかいなア、御飯屋の方が安うおますわ。」

と答へた。宿泊料と食料とで、一日四十錢を支拂ふ位なら、何も好んで安宿に泊る必要は無いので、自分は奇妙な木賃宿があるものだと思つた。

女將は仔細らしう筆を噛むで、原籍地、前夜の宿泊地、現住所、職業、姓名、年齢等を問ふので、自分は罪人が警吏に對する様な態度で、心細う又哀れ氣に申し立て記入をして貰ひ、宿料は蒲團一枚で二錢の相違があるばかり寢室には上下の隔が無いとのことに、十錢を支拂ふて上等の方に取極め、先づヤレくと安心して店の光景ありさまを見ると、入口よ

り正面の柱には、八日持のポンく時計が懸つて居り、左側には二階に通ずる段梯子があり、その壁には管笠くだかさ一個が懸つて、下には擔ひ棒や安宿あんどんと記した古軒燈が置いてある。四人の小兒は何時の間にやら奥に行つて、四歳位の女子一人が机に凭れ、肘を枕にスヤスヤと寝て居る其顔に、見惚れて居るのは女將であるが、自分も亦無心無邪天使に似たる面影を、斯る場所柄しやうばいに見やうとは思ひも寄らぬので、暫くは我を忘れて見惚れて居たが、端なく女將の眼と相合して互に微笑するを禁じ得なかつた。

「寝なはるか、遊びに行きなはるか。」

是は滅多に出さぬ女將の取つて置きのお嬌らしく、自分は草臥れて居るから直ぐ寝さして欲しいと答へて、伴はる、儘二階に上つたが、階下には翼の無い天の使が眠り、階上には世路せろに勞した窮民が寝て居るので、例に依つて感慨は泉のやうに湧いた。

木賃宿の二階！先づ自分を一驚せしめたのは、室々の比較的清潔で、掃除の能く行届いた一事である。自分は最初、木賃宿とは蚤と虱と南京虫と臭氣との集合した處で、これ等を綜合した代名詞を、木賃宿といふのであらうと思つて居たのであるが、何ぞ計らん當家の二階は、普通の住家と別に變つた處はなかつた。即ち上り口より右に半間の廊下があつて、両側には二室宛三疊敷三室と二疊敷一室、突當つた處にも三疊の一室がある。總て二階中五室この疊敷が十四で、室々の境界は襖や硝子障子で仕てあるから、一見木賃宿の極上等の部なる事を知悉せしめた。

女將は蒲團を敷きながら、

ちるなア。」

と答へた。

「道後には何だすなア、大阪に劣まげん様な別嬪まが居りまッせ。宵から朝まで四圓五十錢ですが、別嬪は随分居りまんなア」

「讃岐の金刀毘羅にも美人が澤山居るなア。十一時、社會でいふ十二時からぢやけんど、四十錢で泊めて呉れるわ。」

それより兩人は、多度津の魚市場の小なる事、伊豫三ヶ濱のは規模の大なること、同地の汽船宿久保田の町疇ななこと等を語つた後、

「新聞に金を拾ふたことが折々出て居るが、私等わしらは一度も拾ふたことが無い。」

と中國辨の方はいつたが、其後は鼾かんせい聲雷らいの様に響くのみであつた。

十二時過る頃、一人の男が突當りの室に入り、二十三の女と三十五六の男とは、二疊の室に入つたので、二階の十四疊は十四人の客で充滿し、階下の客二人と此家の家族八人と、合せて二十四人は沈黙の眠に入つたが、半夜、夢結ばれ難いのは假面の窮措きゆうそく大で、天井を暴れ廻る鼠族の騒ぎや、鼾聲や、半風子の爲に、轉輾反側して漸く翌日を迎へた。

午前六時、先づ左の端に寢て居た坊主頭の男が去つたので、自分も起き出た。七八時頃迄居つて、朝の木賃宿を觀察したのであつたが、更に眞の木賃宿、最下等の安宿を、觀察せうと思ひ、其日は眠つた。

下等の木賃宿

今回は友人加藤唾蟬あせん君と共に、探見することになつたので、思ひ切つ

て最下等の所へ行かうと相談し、備忘録や大阪の裏面といふ手記を按じた結果、北區の萬歳橋附近こそ宜かろうと決して出掛けた。

萬歳橋附近は北區北野東の町といつて、最近大阪市に編入された場末で、窮民の巢窟、罪惡の潜める所、といふのは少し大袈裟であるが、兎に角木賃宿が平田政治郎、南藤吉、中野熊治郎等都合四軒散在して居るので、普通の町とは異つて居る事が判る。

右のうち中野は上等の部に屬する方で、平田、南等は下等である。前科者、賭博、喧嘩、毆打傷人等、警察等の厄介になる事故の持上るのは、所謂客種の最劣等な平田方で、最下等の窮民が止宿し、自然室内夜具等の不潔なのは南甚五郎方と判然したので、自分等は何れへ入らうかと暫その門邊かどを徘徊して、先づ甚五郎方を見ると、東向き西側の角の家がそれで、総間口五間、奥行は四間位あるべく、南の端に半間の入口があつて、大分繁昌して居るらしいので、自分等は愈々此處こゝにて決決して入つた。

店庭の突當りにある三疊敷の一室は、帳場のあるので、直ぐ關所なることが判つた。例の怪し氣な机の前に座つて、仔細らしう、筆を弄んで居るのは、三十四五の主人あるし甚五郎らしく、其前の壊れか、つた角火鉢に對して居るのは、女房か、二十七八の髪はぐるく巻の女である。傍かたえには九歳計りの女の子と、卑し氣な三十五六の女二人腰掛け居り、庭には煙管らおの仕替しかへの道具箱二荷かと、錫杖一本、他には管笠管、竹杖、南無妙法蓮華經の背負ひなど、所狭き迄列べてある。唾蟬生は厚司姿のみすばらし氣に、

「泊めて貰へますか。」

と、その切込み様は自分の及ぶ處ではない。女房は自分等の姿を熟々見て、何の愛想氣もなく、

「彼方へ行きなはれ。」

と待遇ふといふよりは、寧ろ命ぜられたので、二人は竹皮草履を庭に脱ぎ捨て、帳場の向ひ側の客室に通つたが、其時上り口の三疊の一室では、老夫婦が塗の剥けた箱膳を中央にして、怪し氣な物を肴に口の欠げた爛壇より、慰勞の御酒を仰いで居るのを見た。

奥の客間(?)は西手が六疊東手が十二疊で、疊の見へぬまで布團を敷きつめ、既に七人の客が五人は東枕に、二人は西枕に臥つて居たが、自分は其狀の動物に近いのを憐まずには居られなかつた。昔日、修學旅行で某地に宿泊した時、同窓の學友と共に、斯る寢様に一夜を明かしたこともあつたがと、過し快樂を想ひ浮べては、例の種々な空想に耽つて、果しなう胸の迫るを覺へた。宿帳に記入を終り、宿泊料を五錢宛支拂ふた後、自分等は十二疊の室の、主無き蒲團の中にもぐり込み、西を枕に即ち動物の群に入つた。此室は最うこれで一人を入れる餘裕があるのみで、唾蟬生は北の端に隣し、自分は中央に寝たが、蒲團に何とも言へぬ臭氣があるのみか、半風子や南京虫の襲撃が激しいのは、豫て期して居た事とはいへ、實に一種形容し難い不快の念に堪られなかつた。殊に唾蟬生の北隣に寝て居る二二三の質朴氣な若者が、手足に負傷したとかで繃帶をして居るため、それより漏れ嗅ふヨードホルムの臭氣には、二人とも閉口せざるを得なかつた。然し繃帶先生は自分等の新來歓迎するかの様に、

「貴郎等は何處だんね。」

二十世紀初頭、大阪における木賃宿の状態

とポリく食うて居た豆の袋を蒲團の下に隠して、唾蟬生に話し掛けるのである。色は日にやけて黒く、眼ばかりギロく光る若者であるが、極めて好人物らしいので、自分等は巧みに應話して、その人と爲りを尋ねると、若者は生粹の大阪ッ兒で、昔は北野邊で相當の商賣をして居たが、失敗又失敗と續いた、め、今は親子四方に離散し、只己れのみ懐しい故郷を去りかねて、今は青物の行商を營むで居ると答へて、神戸と大阪と何れが暮らし易いかとか、十五圓程あれば面白い正月を迎へることが出来るとか、手と足に負傷したので五六日休み、最う二圓程食ひ込むだなど、腹藏なく身の上を語つた後、

「今夜は晩飯を八錢がどこ、三人前に一錢足らぬ程食ふたよつて、腹が大けうなつたわ、太鼓の様になつたわ。」

といつては、と笑つたので、自分等も思はず吹き出した。

東枕の一行を見ると、両端の二人だけは白河夜船の様であるが、他の三人はなかく寝入りさうもなく、何事か話をして居るので、耳聳て、聞くと、何れも土方仲間の話すことは餘程面白い。

「へ、ン、これでもな、神戸の船渠で働いて居つた時分には、金廻りが好かつたものぢやから、福原に遊びに行くぢやらう。すると貴様娼妓によ、情死を勧められた事もあつたからなア。何うぢや、豪からうが、遊びに行かんかい今夜・・・。」

これは音吉といふ四十男が、酒に酔うての追懐らしい

「天満座や福井座は面白いなア。芝居は南に限るが、遠い・・・一里もあらうなア。五階の傍には淫賣婦の馴染みがあるが、それも遠いから行けん。へっへっへっへっへっ。」

長藏といふ三十一二の男は、斯ういつて蒲團を被り、

「世間ぢやア恐ろしいものを、地震、雷、火事、親父といふが、俺等の恐いものは雨より他ないて。三日も降られてみい、口が餓あがつてしまふぜ。」

二十八九の青治郎といふのが、斯ういつた後は、名古屋・・人夫・・朝鮮・・從軍・・師團・・など漏れ聞えて居たが、果は何れも軒聲雷の様に成てしまつた。

一日の勞働、總身に汗を垂らして飯り來り、漸く破れ汚つた煎餅蒲團に其身を横へて、夢に昔を尋ねる彼等の生涯は、誠に神聖である。意味深い、涙多いものである。自分は隣室や二階に當つて、騒々しう唄ふ者や罵しる者の聲を聞き、又

「焼芋を買うて食ふよりも、三錢で飯を食ふ方が利益だつせ。」

といふ、繙帶先生の哀れ深い言葉を聞いて、何となく悲しうなつたので、便所に行く様な風をして此家の模様を見るべく、蒲團の中より這出た。

十二疊の室の北に隣つた一室は、表通りに面した六疊敷で、土方手傳業の一族三人が、久しい以前より借切つて、貧乏世帯をして居るのである。男は四十四五、生活に戦ひ敗れた面影銷沈し、三十二三の女は其妻であらう、洗ひ晒しの木綿縦縞の袷衣に同じ絆纏を着し、髪は例のグルく巻の貧に窘れた姿哀れ氣に、二十五六の女は其妹らしく、腹の際立つて大きいのは、妊娠六ヶ月と見受けられた。障子は破れ壁は落ち、見るからにいぶせき住居で、小さい棚の上には茶碗、土鍋、土瓶、小箱等が載せてあり、其下には壊れか、つた箱火鉢を置い

て、口の欠けた赤土瓶がかけてあつた。この箱火鉢こそ飯を炊き、菜を煮、湯を沸かし、茶を煎じ、煙草を燻らし、暖を取るの諸用に供せられるので、これが中流以上の家であれば、火鉢、蓆盆、焜爐、竈、炬燵等を用ゆるのであるが、一器を以て數器を代用する貧天地の情況は、これに依つて充分想見せられるのである。其他室内は檻樓切れや紙屑が散亂して、一種の臭氣鼻を衝くなど、到底一時間と止まつて居ることは出来ない。自分の故郷に新平民の一部落があつて、其牛馬と雑居的の不潔なものには曾て鼻を摘まんだ事があつたが、今木賃宿で斯る有様を目撃しては、寧ろ新平民の部落にこそ、より多くの清潔法が行はれて居たことなど想ひ浮べ、亦斯る一室に從容として、家庭の團樂を求め居る一族の心事に想ひ至れば、自分は深く同情するの他はないのである。

客室は右の他、裏の井戸端に四疊半と三疊半の二室があるが、何れも土方の夫婦者が借切つて、自炊をして居るのである。家賃は蒲團の損料を合して、一日一人前四錢で、毎日徴役されるさうであるが、其日の稼ぎ人のことであるから、米代の都合の悪い時などは他の獨身者等と同じ様に、飯屋に出かけて三度食ふのである。二階は十五六疊の大廣場で、殆ど乞食同様の者が泊つて居り、従つて宿料も三錢の最下等といふ處より、障子一枚の隔もしていないので、煙管の仕替二名・呆放陀羅經一名、南無妙法蓮華經二名、豆賣二名、四國遍路一名、夫婦者三組等は、宛然雜居の共同生活をして居た。

表の上り口の三疊の室で、塗の剥げた膳に差向ひ、晚酌の酔をかうて居た老夫婦は名古屋在の生れで、年若い時分より夫婦共稼ぎの窮境

に在りながら、其處に人知れぬ樂地を求めつゝ、貧と饑餓との戦ひに汗して、三十餘星霜を送つたのであるが、男は寅の年の五黄星なるにも拘らず、豊臣秀吉のそれに等しい膽魂もなければ、従つてそれと同じ運命に遭遇することもなく、我から世を捨物の遊人肌となり、天地を木賃宿の貧に限つて、朝より夜の更るまで賭博と飲酒に耽るので、妻なる女も四十六七の、浮世の酸いも辛いも嘔みわけた身とて、夫は立派な遊び人として、賭場の掛引に敗を取らぬ様にと後押をし、己れは操り人形の木箱一荷を擔うて、攝河の在所で辻浄瑠璃を語り、お半長右衛門の桂川や、辨慶上使の昔の戀に、田舎の子守女を泣かせなどして、斯くて得た金はその大半を酒屋の店頭みせまへに散すので、果は狸々：狸々・・・と綽名あだなを呼ばれる様になり、夕暮取り来る木賃宿の門口に匂ふは酒の香、これが唯一の命の糧ぞといふ有様で、自然男は女房に養はれて居るから、遊人肌にげに似氣なくも女房に對しては頭が上らず、女房が操り人形の荷を庭に下すと、やれ今日は寒むかつたらうとか、腹が減つただらうとか御機嫌を取り、亭主と女房と其地位の轉倒せるなどは、貧天地特有の現象であつて、他所では見られぬ滑稽である。況して亭主が女房の襦袢より腰卷に至るまで洗濯して、勘氣、これ觸る、事のない様に慮り、斯て一杯の濁酒どぶちにあり付いて舌鼓を打ち、人生無上の快樂を唄ふに至つては、滑稽の神髓しんすい馳はて悲劇の極となり、その心事、寧ろ大に憐れむべきものがある。

木賃宿と安飯屋！區役所の門限に必ず代書屋の散在せる様に、木賃宿の存在せる部落には、必ず一二の安飯屋が繁盛して居るのである。

二十世紀初頭、大阪における木賃宿の状態

一室借切りの夫婦者は、南京米を炊き醬鰯の鹽辛として自活し、飯屋に通ふ者は稀であるが、獨身者は木賃の煩ひを避けて、皆二度の食を飯屋に仰ぐので、暗に飯屋の勢力なるものは、蔑るべからざるものがある。然れば木賃宿の總てを知らうと思へば、是非この飯屋を觀察せねばならぬので、自分等は萬歳橋の南詰にある丸吉といふ飯屋に入つた。綱引天神南手の東側にも多田宇吉といふのがあつて、飯の盛が好く菜の味あじいのは丸吉より一等上だとのことであるが、木賃宿泊人の多くは丸吉に行くので、それで自分等も丸吉に入つたのである。

二坪程の庭には、長さ一間幅二尺位の食卓二個を置き、幅の狭い腰掛はそれに對して四個並べあり、優に十二人は立食の宴を開き得べく出来である。自分等の入つた時は既に二人の客が各一卓宛を領して、夏司を着た二十六七の男は、數の子と漬物を菜に大盛を食ひ居り、五十六七の半纏を着た老人は、中盛と豆の煮付で舌鼓を打ち居る處であつたが、自分等は左手の壁に面じて居る卓に向ひ合うて腰を掛け、先づ壁に張つてある口上書を見ると、

舌代	
大	三錢
中	二錢五厘
割	一錢
米高に付當分の中右の通り御願申上候	
丸	吉

と記してある。仕出し場は入口の右手にあつて饅頭屋のそれと同じ様に竹の棚をし、その下の箱臺上には數の子、子芋こ、空豆、鯛、貝、鮓しほ

などの煮湯付けたのや漬物を各々小皿に盛つて列べ、傍に一錢と記した板を置いてある。で自分は好物の数の子一皿と中盛一碗とを注文して、一箸食うてみたが驚いた。飯は一種の臭氣あり、数の子は勿論最下等の悪臭紛々たるもので、倒底咽喉を越しさうにもないから、苦々し氣にして居ると、唾蟬生はそれと見てとり、何か鍋を・・・と注文して加之に酒を一本と贅澤を極め込むだ。斯くて自分等は牛鍋Ⅱ肉は四五切の葱澤山に對して、水六分酒精四分と分折し得る様な酒を飲み、飯を食ひ菜を食ひ、労働者の微醉と満腹とを買ひ得たが、

牛鍋二人前	五	錢
酒 一合	六	錢
中盛飯一碗	二	錢五厘
割飯 二碗	二	錢
数の子一皿	一	錢
漬物 一皿	五	厘
計金	十	七 錢

といふ勘定を支拂ふに至つては、只その安價なのに驚くの他なかつた。然し安いといのは自分等ばかりのいふことで、實際品物を評價し來つたならば、眞の木賃宿先生達は高くといふに違ひないのである。

夜一夜を、蚤に攻められ、虱に苦められ、南京虫に襲はれ、臭氣に閉口して、翌朝六時眠り醒むるや、朝の食事を同じく丸吉方で喫した。店の者三人は各々手を分けて、飯を盛るのや菜を入れるのなぞ、非常に忙しい様子であるが、お客様等も又晝辨當を二錢がとこ入れてやとか、盛を充分に頼みますぜとかいつて、詰掛けくつて遂には腰を掛け

る處もないので、立つて手早にかき込むのもあれば、又しやがんで食ふのもあるなど、其状、饑饉地の窮民が、争うて一粒の米を得やうとするに等しく、見るからに憐れを催した。自分等は斯る中に立つて、手早く朝飯(代金兩人にて八錢五厘)を終り、七時頃飯宅して唾蟬生は洋服に、自分は羽織に着かへた時には、ヤレくと何だか嬉しい様な思ひがした。

*

如上の事項は、只木賃宿に泊つて見聞したことを、拙い筆で叙述したに過ぎないが、これに依つて自分の情想は、端なく人生問題に接觸したので、貧福平均、階級打破、労働者保護、社會黨組織など、一面社會に立つて呼號すると共に、他面に於ては共同長屋の設立、共同販賣店の開設、貧民銀行の新設、貧民俱樂部の開始など、窮民の爲に正當の保護を與へたいものと、例の空想に耽つたのである。若夫これを實行するには、社會學者宗教家等言論の士に恃と共に、世の富者豪家等にも信頼せねばならぬので、願くは此項を讀むの士は、瞑想沈思、生活に戦ひ敗れたる弱者を、己れに出で己れに販りしものと、一言の下に排することなく、彼等の上にも人類相愛の同情を濺がれんことを、敢て乞ふ、敢て乞ふ。(終)

三 木賃宿と安飯屋に関する分析

天民の「木賃宿」によれば、天民は一九〇一(明治三四)年九月頃に大阪の木賃宿に宿泊した。本ルポルタージュは、二十世紀初頭にお

ける大阪の木賃宿を天民がキリスト教ジャーナリストの同情・友愛精神の視角からまとめたものである。

木賃宿の近くには安飯屋がある。と言うのは、木賃宿は一般に食事を提供しないからである。従って、木賃宿の近くには必ず安飯屋が必要となるのである。ここでは上等・下等の二つの木賃宿と、安飯屋の有り様を検討したい。なお一間は六尺（一八一・八センチメートル）、一坪（歩）は二畳で三・三平方メートルである。

（二）木賃宿

（1）「上等の木賃宿」：「安宿業」丸山政治郎

場所は南区難波河原町二丁目（新金毘羅神社界隈）である。

宿料は一泊十銭で布団二枚、八銭で一枚である。いずれも食事はない。しかし食事を無理に願うと、一食で食事は十銭である。

宿帳には原籍地（本籍）、前夜の宿泊地、現住所、職業、姓名や年齢が記されるが、実際は女将が記入する。誤り無きを期したのであろう。

間取は、二階が三畳敷き四室で、二畳敷きが一室である。部屋の仕切りは襖やガラス障子である。部屋は比較的清潔で、掃除が行き届いている。布団は継ぎの入ったもので、臭気はないが、ガサガサものだという。枕は木箱のような物で、寝心地が悪かったようである。一般には、客一人につき畳一畳分である。

客の仕事は、「土方、千日前見世物口上役、ガラス商」などであった。夜の状況では、天井の鼠、いびき声や、鼠の存在でなかなか夢を結ばなかった。

なお、客の外出は大体は午前六時頃である。

（2）「下等の木賃宿」：南甚五郎方

場所は北区北野東の町（萬歳橋付近）である。ここには木賃宿が四軒あるが、天民は、友人の加藤啞蟬と共に、下等の二軒の内の一軒に入っている。この家は、「総間口五間、奥行は四間位」である。

① 一階では

客室が三畳、六畳、十二畳の三室あり、井戸端に四畳半と三畳半の二間がある。

宿料は一泊で五銭である。布団は敷きっぱなしで臭気あり、鼠や南

京虫の存在がある。

客の仕事は、「青物行商、土方」などである。その他に、世帯を持った家族が住み込んでいる。この彼等の六畳には「土方手傳業の一族三人（夫婦と妻の妹?）」が自炊生活をしている。彼等よりも、被差別民

「の生活の方がより清潔」であるという。また四畳半と三畳半にはそれぞれ「土方夫婦」が住んでおり、生活の細かい描写がある。

家賃は、布団借料を併せて一人四銭で、毎日徴収される。これは、家主が彼等の経済状態に対応しようとしたものである。「一間借切りの夫婦者は、南京米を炊」いで自炊をするが、独り者は飯屋を利用する。従って、飯屋の勢力は侮れないものとなるのである。

独り者の宿泊者の会話には、遊郭などの話があった。

客の外出は一般に午前六時頃である。

なお「三畳の老夫婦」はここで三十有余年もの長い間を滞在していた。「夫は立派な遊び人」で、妻は「辻浄瑠璃師」である。

② 二階では

一泊の宿料は三銭である。一五、六畳の間切りで仕切りはなし。「殆ど乞食同様の者」たちである。

客の仕事は、「煙管の仕替職二名、呆放陀羅經一名、南無妙法蓮華經二名、豆賣二名、四國遍路一名」、その他の「夫婦者三組」などは「雑居の共同生活」であるという。

客の外出は、ここでも午前六時頃であった。

(二)「安飯屋」：丸吉

「丸吉」の場所は萬歳橋南詰である。ちなみに綱引天神南手の東側に多田宇吉の飯屋もある。

「安飯屋」の広さは、二坪ほどの庭に「長さ一間幅二尺位の食卓二個」と、腰掛が四個あり、十二人が一度に食することができる。

飯は、飯大盛りが三銭、中盛りが二銭五厘、小が一銭である。

天民は、夕食に数の子と中盛りを注文したが、飯は臭気があり、数の子は「悪臭紛々」であった。酒は「水六分酒精四分」といい、その他に大分食べて、友人との二人前が十七銭である。ただし天民たちには激安と映り、朝食は二人で八銭五厘であった。

なお木賃宿の歴史的形成や地理的關係については、ここでは割愛してある。文中の「五層楼」「南の五階」と呼ばれ、一八八八年七月竣工）などと併せて、地方自治体史などを参照されたい。

四 結びにかえて——貧民をめぐる天民の理想について

(一) 天民の理想

天民は木賃宿に宿泊・探訪した結果、一方において「貧福平均、階級打破、労働者保護、社会黨組織など」を社会へ訴え、他方においては「共同長屋の設立、共同販賣店の開設、貧民銀行の新設、貧民倶楽部の開始など、貧民の爲に正當の保護を與」えることが理想であると指摘している。これを実行するには社会学者や宗教家などの「言論の士」に待つと共に、世間の富者や豪家なども信頼しなくてはならない、と述べている。

最後に、天民は読者をして「生活に戦ひ敗れたる弱者」「の上にも人類相愛の同情を濺がれんことを」願っている。

(二) 天民の理想について

一方で天民が挙げている諸点は、アトランダムであるが、貧福平均するには階級打破が必要であり、労働者保護のためには社会黨組織の必要性を述べているものと考えられる。また「労働者保護」も述べられているが、いわゆる社会的請求権、とりわけ労働基本権（団結権、団体交渉権、争議権）の思想が明白に指摘されていないのは歴史的被制約性の故であろうか。

他方に挙げられている諸点は、後年、例えば賀川豊彦などが神戸で提唱・実現して行くことと係わっている。またこうした社会的な施策を実行するには社会学者や宗教家などの協力や、有力な実業家をも信頼しなくてはならないと述べている。

天民は、貧民救済のためには、「貧福平均」、「階級打破」や「社会党組織の必要性」などを主張しているが、果たしてこうした思想はどのようなにして得られたのであろうか。すでに一八九七（明治三〇）年一月に鉄工組合が組織されると同時に、機関誌『労働世界』や、また翌九八年六月には内村鑑三の『東京独立雑誌』が創刊され、同年一月には安部磯雄・片山潜・幸徳秋水らは社会主義研究会を結成している。一九〇〇（明治三三）年一月には、社会主義研究会を改めて社会主義協会が発足する。また児玉花外は西川光二郎らと『東京評論』を創刊する（『東京独立雑誌』の発展を期す）。翌一九〇一年五月には安部磯雄や片山潜らは社会民主党を組織する（二日後に禁止）。天民はこのような動向の影響を受けたのであろうか。天民が片山潜と深い交際をした花外と関西で交流していくことは示唆的ではあるが、詳細は今後の課題である。

〔主な参考文献〕

- 岡 保生編「(資料) 松崎天民日記(抄) 上——明治三十五年一月—二月」(『文学』五五卷二号、一九八七年)・「(資料) 松崎天民日記(抄) 下——明治三十五年三月—四月」(同誌五五卷三号、同年)
- 坪内祐三「探訪記者松崎天民 第七回 二度目の関西時代」(『ちくま』三〇七号、一九九六年)・「探訪記者松崎天民 第十回 大阪新報記者となる」(同誌三二〇号、一九九七年)
- 田宮正彦『近代都市下層民子弟の教育——労働児童の視点から』(自刊、二〇〇一年)

二十世紀初頭、大阪における木賃宿の状態

後藤正人「児玉花外『社会主義詩集』と大塩中斎顕彰——社会的ロマン派詩人の思想と行動」(『立命館大学人文科学研究所紀要』七十号、一九九八年)

同上「児玉花外の随筆『木賃宿の一夜』について——西川光二郎・小塚空谷と共に」(『月刊 部落問題』二二六号、同年。後継誌は兵庫人権問題研究所『月刊 人権問題』)

同上「日露開戦直後の東京における最下層民の状態——一九〇四年、天風生『下谷万年町』をめぐって」(『月刊 部落問題』二七三号、一九九九年)

同上「復刻」一九〇二年、渚松閑人『神戸の沖仲仕』について」(同誌二八七号、二〇〇〇年)

同上「児玉花外『社会主義詩集』の抑圧に対する『評論之評論』の批判」(『大阪民衆史研究』四六号、同年)

同上「二十世紀初頭、松崎天民の観た京都盲啞院」(『大阪民衆史研究会報』一〇四号、二〇〇三年)

同上「二十世紀初頭、キリスト教ジャーナリストの観た博愛社——松崎天民『大阪博愛社を訪ふ』の復刻と検討」(和歌山大学教育学部『学芸』四九号、同年)

同上「近代日本の法社会史——平和・人権・友愛」(『世界思想社』同年) 序章「近代日本の法社会史序説」・第五章「時代閉塞」の法社会史——大逆事件をめぐる東京朝日新聞社の松崎天民と石川啄木」。

〔付記〕 本稿の原型を二〇〇三年六月二五日に大阪民衆史研究会例会で報告して(二十世紀初頭、大阪の木賃宿——キリスト教ジャーナリスト松崎天民「木賃宿」をめぐって)、参加者の教示を得た。記して、お礼を申し上げます。なお資料については、長男のワープロ入力協力を得た。

(二〇〇三年八月一七日)